
ミワクの国

琉生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミワクの国

【Nコード】

N1770S

【作者名】

琉生

【あらすじ】

【企画candy store参加短編集小説】ようこそ。ミワクの国へ。こちらの国には、ミワク的な7つの物語があります。その7つの物語を紹介していきたいと思います。良ければ、最後までお付き合い願います。では、始めましょう。「20110403」
「20110813」

1) アリスクリーム（前書き）

一つ目の物語は

【アリスクリーム】

年齢感覚は人間と同じです。

1) アリスクリーム

蝉の五月蠅い鳴き声に日差し強い夏のある日。公園の地下では、お菓子調達部隊の総督と隊員達は姿勢良く立ち円になって打ち合わせをしていた。

「今日は花壇のひまわりの下のアイスクリームにするぞ!」

「はい!」

総督の一言に短く威勢良く返した後、彼らは総督と共にアイスクリームを目掛けた。

主である女王様……アリの女王様にお菓子を捧げる為に…。

「ああゝ暇だわ。」

一面大理石で出来た部屋に低いダラツとしている声がぶち当たり跳ね返って消えてた。

「ほんとに暇……」

こんなに暇なのは、いつぶりかしら…。

「って昨日ぶりか……」

とぶつぶつ言ったのは、メアリー＝フリング。ここの若すぎる13

の女王だった。

病弱な旧女王の母と変わり、去年、メアリーは女王となった。

ぶつぶつ言っていると、後ろの大きな振り子時計が鳴いた。
すると、コンコンとノック音がして「失礼します」とメアリーの執事が入ってきた。

急いで姿勢を戻して、シャキつとした。

メアリーは思わずシャープで落ち着いた声と、その姿にドキドキと
してしまう。頬も熱くなってしまう。

「失礼します。女王様。おやつの時間でございます。」

成人して間もない彼はピシツとしたスーツに、フレームの細いメガ
ネをした男性執事のアーム。

メアリーはそんな彼に思いを寄せていた。

「そう。持って入らせて。」

「はい。」

素っ気なく言ってしまう。気持ちとは裏腹で天の邪鬼になってしま
う。

アームの返事で観音開きの大きなドアが、一気に体を伸ばす。

同時に「失礼します！」

と大きな声を揃え言ったかと思うと、数人の男が足並みも揃えて入ってきた。

うるさいわ…。

よく頑張ってる事は、知ってるけど。

「今日は何？」

彼の声を聞きたくて問うと、アームはため息をついて面倒くさそうだった。その態度に胸が痛んだ。

「はい。その者達より、お聞き下さい。」

「え！？」

私は、アームに教えてほしかったのよ。

なのに…！

そんなメアリーを無視してアームは指定の左横に立っていた。

素っ気ない…。

教えてほしかっただけなのに…。

仕方ないか…。

「ねえ、お菓子調達部隊の総督さん、今日は何のお菓子かしら？」

「はい！今日はアイスクリームです…！」

「そう。ありがとう」

また大きな声の総督にうんざりしてしまう。
折角のお菓子をおいしく食べる為切り替える。

「持ってきて頂戴。」

キュルキュルつと音をさせながらお菓子・ティーセットの全てある
カートをアームは押してきて、サッサと支度をした。

出された物はアイスクリームなのかと疑ってしまう程だった…

「なに？これ…？」

いつもはこんな事は言わない。

彼女は文句をつけたくなるような物でも、感謝しながら食していた。

でも、今回は違った。

「汚いわ…」

メアリーの目の前には、茶色い土の混ざったどろつとした一応アイ
スクリームがあった。

匂いもあまりいいものでわない…。

ぞぞつと背筋に寒気がした後、生唾をごくつと飲み込んだ。

大丈夫よ！これは食べれる！

でも、抵抗あるわ…

「汚いのよねー…見た目が」

この時、この一言で、変わった。

「でも…いくわ…！」

スプーンにアイスクリームをのせ口の中に持って行った。

この動作の間に、アイスクリームは自分自身の遺伝子を組み替えた。シユーと凄まじい速さで。

アイスは凄く腹が立っていたのだ。

「汚い」と言われたからだ。

だから、味はおいしく、見た目変わらず、でも…食べた者を一生最初の形に戻らないようにした…。

『みてなさい。お前をこの国から追い出してやるわ。』

生涯孤独にしてやる！これは罰よ！私を汚いと言った罰よ！』

綺麗で美味しいと言われていたアイスクリームは酷く傷つき、それは憎悪として現れた。

憎悪の塊だと知らず、一口食べた。

「おいし…い。」

味は悪くなかった。

なによ。見た目とは全く反対で良いじゃない。

でも、中身は最悪だった。

「えっ！なに！何なの！？」

カランツとスプーンが手から零れた。

それに反応してアームや隊の者達が、バツとメアリーを見る。
それは合図のようだった。

「メアリー様！お体が！」

彼女の体は、忽ちグーッっ大きくなっていく。

しかも、人間の少女になりながら。どんどん、どんどん、大きくな
っていく。

机椅子は直ぐ壊れ、大理石の部屋も段々と壊れていた。

全てが、壊れ崩れていく。

「アーム…助けて！」

怖い…体中が痛い…。

メアリー自身は体の拡張に痛みが伴い激痛が走っていた。
弱音を吐きそうになったが彼女は女王だった。

「早く…！」

声が変わってる…？

でも、どうでもいい！アームやこの国のみなの方が！

「早く！逃げなさい…！」

叫んだ時、がんと頭に大きな大理石の塊があたり目の前が真っ黒になった。

……メアリーは自分の身よりも、この国のみなを大切に思った。

アーム……。みんな……逃げて……。

「いった……。」

目が覚めたメアリーは、激しい頭痛に襲われ、咄嗟に頭を抑える。

ここは？アームは？調達部隊や国のみんなは？……どうなってるの？

頭を抑え下を向くと、何かがはらはらと耳の横を流れた。髪の毛だった。真っ直ぐ艶々とした漆黒の。それに、その下には細いきれいな足がスツと伸びハの字になっている。

え？うそでしょ？

まさか、ほんとに……？

手を見ると人間の手。顔を触ると全て人間のもの。体だってそうだった。13と年相応のものになっている。

その体には、白のノースリーブのワンピースがあった。

「なんなのよ……。」

これからどうしろっていうのよ……。
アームもいない……みんないない……。

って、みんな…は？

ハッとしたメアリーは直ぐに下敷きの地面をみると、ふわふわした土の上からワツと大量のアリが湧き上がるように次々とでてきている。

これって、もしかしたら！どけないと！

メアリーは立ち上がり少し離れた場所に座った。退いたら、更に湧き上がってくる。

そして、メアリーのいた場所に集まり円を作っていた。真っ黒の円だった。

そんな中、一匹だけメアリーの元にゆらゆら倒れそうになりながらも、歩いてきているアリがいた。

大丈夫なのかしら？
こんなにもフラフラして倒れそうなのに…。

「メアリー様。」

「え？」

メアリーの鼓膜が愛しい人の声で揺れた。

「メアリー様…。」

またもう一度その声で揺れた。

声のする方へ顔を向けると、フラフラのアリの方に向いた。

「…アーム？」

「…はい。」

はっと力が抜けてため息がでた。

よかった…無事で…。

「…よかった。」

胸がきゅうと締め付けられ痛くなり、目がだんだんと潤んできて涙が溢れそうになってきた。

それでも、口の端は持ち上がる。

今、凄くブサイクになってる…ただでさえ、ブサイクなのに…でも。

「…アーム…ほんとに、無事でよかったわ。国のみな——」

「出て行ってください。」

嬉しそうなでも愁いを含んだメアリーの声と言葉を一気に切り捨てたアーム。

メアリーはその言葉に思考が止まってしまった。同時に、目の前も真っ白になった。

さっきまで、上がっていた口の端は、ゆっくりと下がっていく。

「……………え？」

…なぜ……？

「…なぜ？と言いたそうな顔をしておられますが…」

今にも倒れそうなのに、健全な時と変わらない声調。

だが、いつもよりも淡々としていて冷徹にメアリーには感じとれた。

「…あなたは、この国の王でありながら…この国を壊した…。」

冷たい凍りついた鋭利な矢は一気にメアリーに刺さり凍り付かせた。
だからなのか自然と零れた涙は温かく感じた。

「……それに、今、聞こえませんか？…この事に酷く腹を立て怒り
狂っているみなの声が。あなたは最低な事をしたんです！」

「……」

確かに…聞こえてくるわ…。今更だけど…。「どうしてくれるんだ
！」。「出て行け」「お前は王なんかじゃない」とか。

「…確かに。…確かに…そうね。みなの声ははっきり聞こえる。」

でも、私は只アイスクリームを食べただけよ。

なぜかわからないけど、勝つてに大きくなって人間になってしまっ
たのよ。口にはしないけど…

「聞こえているなら、さっさと出て行って下さいー！」

強く荒げた声にビクツとしてしまう。めったに荒げない彼だったからだ。驚きよりも、胸に走った身を貫くような痛みの方が更に強かった。

「…わかったわ。…出て行くわ。…さようなら…。」

下を向いて勢いよく立ち上がり、手は握り拳に、後ろを向き勢いよく走った。涙は当たる空気に押され左右に散りキラキラと光った。

無我夢中に走って、ふと止まった。ゼイゼイと言いながらも、辺りを見渡すと見た事のない光景があった。

周りは全て田畑、前と後ろには真っ直ぐの道があった。

上には青が澄んでいた。でも、徐々に暗くなっていく青は彼女を追い詰めて行った。

後ろから風がドツと吹いた時、クスクスと彼女を嘲笑った声が紛れ込んでいた。

2) 扱女弾（前書き）

二つ目の物語は

【扱女弾】

アメダマ

女性の方に失礼な文字になっておりますが、作品構成上させていただきます
ただいております。

2) 扱女弾

9月の終わり。頭上の青は澄んでいた。スーッと空気は心地いいぐらいの速さで動いていた。

そんな中、授業中で誰もいない学校の屋上で、ある少女はグラウンドで体育をしているある少年に銃口を向ける。

「……見つけた。…私のアメダマ…。」

…——バーン

少女の声が空気を震わした後、銃声も空気を震わした。

だが、少年はさっきと同じで体育に励んでいた。他の者達も何事もなく、励んでいた。

それでも、少女の口元は嬉しそうに持ち上がっていた。

……—銃声は少女にしか聞こえてはいない。弾も少女にしか見えていない。

11月中旬。

中庭に大きな銀杏の木のある私立中学校の昼休みを知らせるチャイムが鳴る。同時に昼食の知らせるチャイム。

生徒職員も給食はないので、学食が弁当だった。好きな人と好きな

場所で昼食をとるのが普通だった。

「優瞳ユウヒ！飯食おうぜ！」

弁当を右手に顔の横あたりまで上げを誘う親友の橙吾トウゴ。だが、優瞳と呼ばれた男子生徒は誘いを蹴った。

「わりッ！今日、無理！ありがとな！」

両手を顔の前で合わせ謝ってから、急いで弁当を持って教室を出た。教室の3―Aを出た後、慌ただしく廊下を駆け、階段を駆け下りる。会いたい人のいる3―Eを目指し走る。手にある弁当の事なんて、更々頭がない。きっと中はぐちゃぐちゃだろう。

「愛莉雛アリスうゝ！」

茶髪のおシャレな感じの短髪、右耳にリングピアス2つ。そんな優瞳は、会いたい人の名を言いながら3―Eのドアをガラッと開く。当然、中の生徒達の視線を集める。今はそれどころじゃない。

愛莉雛！いたッ！

会いたい人もこっちをみていた。彼女はうんざりとしたように椅子から立ち上がる。

愛莉雛！

今日も可愛いなあ！
相変わらず冷たいし！

彼女……愛莉雛は漆黒の胸まであるサラサラとした髪を靡かせ、口ッカーにいき巾着を片手に持つと優瞳の前に来る。ふわっと香る甘い香水が優瞳の鼻をひくつかせた。この匂い！よすぎる！

口元が歪みかけたが、なんとか保つ。

「いつも五月蠅いわ。静かにならないの？」

ツンと鋭利な言葉を無表情で言い放つ。

こんな事を言われると、普通なら苛立つか悲しむだろう。

…ヤバイ。

ヤバイぞ、あの冷たさ…。

「ごめん！次気をつける！」

ちょー嬉しいすぎる！

「いいわ。…行くわよ。」

冷たい無表情の愛莉雛は先を行き、後から破顔しへらへらとした優瞳が続く。

正反対な二人はいつもの屋上へと向かった。

灘^{なだ}優瞳。

彼は普通ではない…。

キツイ言葉でさえ嬉しく思ってしまう、極度のM人間だった。

屋上には、誰もいなかった。今日は快晴で気持ちがいいのにも関わらず誰もいなかった。

ラッキー！

俺と愛莉雛、2人つきり！
よっしゃ！

「遅いわ。早く来て」

入り口辺りで喜びに浸っている優瞳を現実に戻す声。

見ると、さっきまで優瞳にいたが愛莉雛は、既に、定位置であるに屋上のベンチに座っていた。太腿に弁当袋を乗せている。

「はいはい！」

なんとも言えねえよ！あの冷たさ！

ルンルンと笑顔でベンチへ行き、愛莉雛の隣へ座る。ぴったりと密着するように。相手の吐息がわかるぐらいにまで。

「ね？」

「はい？」

なんだろ？

俺を呼ぶなんて！

「近いわ」

いつもの冷徹口調の一言に、バコンと一発鉄拳が優瞳の頬にぶち当たった。

ガタンとベンチから落ちると倒れた。

「痛ッ！」

…ひ、酷い…。

ここまでしなくても。

さすがに、ここまでくると優瞳でも喜べないはずだ。それでも。

この痛みも殴りも、あの一言も！たまんねえ！

…もう一度…してください。

殴られた片頬を抑えながら、喜びに浸る。

「あんたが悪いのよ。…たく、早く座りなさいよ。」

「うん。」

ゆっくり立ち上がり、ベンチへ。間をあけて座ると鉄拳はなかった。

「はい。」

「え？」

「飴あげる。いつものね」

ぽかんとしている優瞳の手に赤のナイロンにくるまれた飴をくるむ。しかも、少し微笑みながら。

？

確かに、いつも飴は貰ってるけど、このタイミングで。

……飴とムチか？

でも！よっしゃ！

つくづく単純な奴だ。

それから、二人は並んで弁当を食べた。もちろん、そこに会話はない。

でも、暖かい風が吹いていた。

優瞳は食べ終わり、貰った黄色い丸いアメダマを口に放り込んで、コロコロと舌で転がした。

今年の9月1日。

噂なしで転校生が来た。それが叶女愛莉カナメ雛だった。

誰もが「綺麗……」と思う程の美少女だった。優瞳も例外ではなかった。

優瞳と彼女はクラスも違うし、接点もない。廊下で二度と見かける

ぐらいだった。

だが、10月が近づいた頃。

休日出かけた先で、彼女を見かけたのだ。

田舎のこの地に相応しくない、流行りのファッションを身にまとっていて輝いてみえた。

いつもの制服のセーラー服と違って、纏う雰囲気も違う。

「……ッ！」

優瞳は一瞬にして惹かれたのだ。

それからだった。学校にいれば、いつも彼女を探してしまうようになったのは。

授業中に秘めた思いと名前をノートに書きは消してしまつようになったのは。

10月半ば。

告白をした。

結果、今のようになった。

OKを出された後、彼女に「この飴を1日1つあげるから、ちゃんと舐めて」と言われ約束をした。それで、毎日飴を貰い食べるようになった……。

それから、付き合いが始まった。

昼に殴られた日の次の日の昼。
昨日と同じ場所。

座っている愛莉雛は片手をスカートのポケットに入れて、ごそごそと中を探っていた。
しかも、冷静で無表情の彼女が、下を向き慌てながら焦っているのだ。

「愛莉雛？どした？」

さすがに、いつもと違いすぎる愛莉雛が気になる。

優瞳の言葉にビクツとなった後、顔をゆっくり上げ優瞳の目を見る。

その姿に、はつと見開いてしまった。

「…ない…の」

ぼそつと途切れ途切れの言葉を言う、愛莉雛の涙が溜まっている。
また、ないのつと繰り返すと涙がツウーと流れた。

「何がない？」

泣く愛莉雛の背に手を置き、ゆっくり撫でる。
両手で顔を覆い、益々泣く愛莉雛。

「飴…ないのよ…」

飴？

っていつものか？

でも、別に。

「飴ぐらいなくてもいいじゃん？何となく物足りなさはあるけどさ。」

励ましのつもりだったが、驚いたように愛莉雛はバツと顔を上げる。その顔は怒りと悲しみで歪んでいた。

「いるに決まってるじゃない！たかが飴かもしれないけど、私にとつたら大切な物なのよ！」

はたまた、いつもにない愛莉雛に驚くが。

……不謹慎だけどさ、涙で濡れた目と、キツイ言葉がすげえ嬉しいんだけど。

でも…悪かったよな。

「…ごめん…。」

また愛莉雛は暫く泣いた後、落ち着きを戻し、優瞳の「飯食おつか！」の一言で弁当を食べ出した。

愛莉雛の教室前、別れ際に「絶対に、明日も来て。」今にも泣き出しそうな顔をして言われた。

「当たり前だろ！」

優瞳は笑顔で返し、教室に戻った。

それから、時は経ち翌日の朝。

目が覚めると何となく違和感があった。

何か大事な物を忘れているような感じがした。

何なのわからないまま、学校へ行き授業を受けるが、もやもやした感じが続いた。

そして、昼になった。

「優瞳ッ！飯食おうぜ！」

誘うが毎日断られる橙吾は、懲りずに今日も優瞳を誘う。「どうせ断られるだろうけど」とダメ元で誘う。

「おう！」

「はっ！？」

親友の快い返事に思わずガクツとなってしまう。有り得ない言葉を聞いてしまった…と罪悪感さえ感じた。

「なんだよ？返事したただけだろ？」

「なんだよ？じゃねえ！不拔けた事ほざくな！愛莉雛ちゃんは！？」

「は？」

必死でいう橙吾に、今度は反対になる優瞳。

「は？じゃねえ！」

「！？」

ムキになっている橙吾は、優瞳を引きずるように引つ張りドアの所
くると、手に持っていた者を廊下に投げた。優瞳の弁当も。

「さつさと愛莉雛ちゃんとこ行け！3―Eだろうが！」

バタンツ！激しく閉まったドアと、激しい口調だった。

…？

訳わかんねえ…。

3―E…？

愛莉雛…？

「ッ！」

愛莉雛という子の事を考えると頭痛がした。

その後「絶対に…」と頭の中に少女の声が聞こえた。また、もう
一度…。

『絶対に、明日も来て。』

泣きそうな漆黒の髪的美少女がそう言いながら一瞬で消えた。

……明日も来て……？
明日も……。

無意識の内に体は動いていた。投げられ廊下へ尻餅をついて座っていたが、立ち上がっていた。

……3―E……？

『3―Eだろうが！』

橙吾の言葉が頭で浮かぶ。

またしても体は無意識に動いた。

廊下を足早に駆け、階段も駆け降りた。

まだ、頭の中は朝から続くもやもやがある。

そして、3―Eの教室へ。

ガラッとドアを開けると、中の視線を丸集めするが、さっと戻った。優瞳は頭の中の少女を探す。

……黒髪で、美少女で……。

「いた。」

さつき戻っていった視線達。だが、1人だけ。列の最後尾の席のたった1人だけが、優瞳を見ていた。目を見開き、涙目になってる。

「愛莉雛……？」

そう呼ばれた1人は、ガタツと立ち上がり優瞳の方に駆け寄った。
目に溜まってる涙は溢れ、当たる空気に押され左右に散りキラキラ
と光った。

もう少しという時、彼女は軽く踏切った。
バツと飛ぶと、優瞳に抱きついた。

「来てくれたのね…。ありがとう…。」

首には、彼女の腕が回されている。目には、頭の中の泣きそうな顔
の少女が映っていた。

そして、少女は目の前の唇に、自らの唇を重ねる。

重なった唇から、どこか懐かしい甘さがあつた。その甘さを味わっ
た時、優瞳の中のもやもやした物はなくなった。

唇を離れた2人には、満面の笑みが広がっていた。

「愛莉雛！弁当食べよう！」

「ええ。…でも、その前に近いわ。」

そう言うとき愛莉雛は離れ、ぽかっとしている優瞳の顔面を殴った。
勿論吹っ飛んだ。

……痛い……。酷い……。愛莉雛…。

でも！

ちょー嬉しい！

喜びに浸る優瞳と、それを冷静に見る愛莉雛。

そんな2人だが、周りには甘い香りが漂っていた。

…やっぱり…。

私の選んだ扱女弾は、間違ってたかった。

3) 魔女はクツkey(前書き)

三つ目の物語は

【魔女はクツkey】

3) 魔女はクツkey

「ただいま。」

実験室のドアは、落ち着いた少女の声と共にノックもなく開く。

「あつ！おつかえりい〜！愛莉雛っ〜！」

その事に気づいて中にいた、魔女のデイル「メイダリアは後ろのドアの方に振り返り明るく答える。だが、そう言われた少女は嫌そうな顔をしている。

「あつ！間違えた…」

嫌な顔をしている理由に気がついたデイルは「メアリーね！」と笑顔で改めた。

すると、少女「メアリーの顔は戻った。それを見てデイルは実験に戻る。

「気をつけてよね？」

念をおすように言う声と、椅子を引くような音を背で聞く。

「つか。私、あまり好きじゃないのよ。その名前。」

ピクツと体がし、実験をしている手が止まる。

…なに言ってるのよ！

さつき、デイルの頭の血管が切れた。
デイルは振り返り口調を荒くし言う。

「たつく！あんた失礼よねえ！私が名付け親だつて言うのに！この
名前好きなの！ぐらい可愛い事ぐらい言いなさいよね！」

可愛くないわ！

拾った時は、すごくかわいかったのに！！

振り返つてムキになつていうデイルに「言えないわ。」と自分の
爪を見て素っ気なく答えるメアリー。

可愛くないわ！

右手にある丸底フラスコが割れそうだった。

「で、扱女弾^{アメタマ}どうだった？」

なんとかその怒りを沈めて、フラスコを奥とメアリーの座る前に座
る。

「ああゝ。結構いいわね。アレ。」

「そう。まあ私が作ったもんは失敗はないのよ。」

自信満々に当然のように言うデイル。

……扱女弾は、この寂しがり屋なメアリーの為に作った物。

扱女弾は銃弾。その銃弾は撃たれると、撃った物を恋愛的に好きになってしまう。それと同時に、M人間になってしまう。あ、これは私の悪戯。

で、アメという扱女弾持続時間を継続させる為にある物。それを食べないと、上にあげたような物が皆無になってしまう…。

「でも、昨日、アメを私が無くして食べてなかったのに。いつも通り、お昼来たのよ。」

…え？

「…ありえないわ。」

メアリーの言葉に固まってしまう。

「おかしいわよね？…狂ってたんじゃない？腕が」

また生意気な事を言うメアリー。

「私の腕が狂う訳ないわ。まだ20代よ？舐めないで。」ふっと負けじと腕を組み偉そうなデール。

「大体、可哀想な独りぼっちになったあんたを拾ってあげたんだから、感謝しなさいよ！」

…そうデールは、拾ったのだメアリーを。大雨の中、一本道に倒れた人間のメアリーを。

「それに、寂しいあんたに、女^{ひと}が人の恋愛^{きもち}を扱えれる物だって作っただのよ？」

イライラしていたディールの口調はキツく次々飛んでくる言葉にメアリーは切れた。

バンつと机を叩きメアリーは立ち上がった。

それにビクツと驚いくディールは少し身を引いた。

「さっきから聞いてたら嫌味ばかり！あんたには感謝してるわよ！拾ってくれた事も！拾った私を普通に生活させてくれている事にも！扱女弾を作ってくれた事にも！感謝してるのよ！…なのに！そんなふ——！！」

「黙りなさい。」

罵りながらも、半ば泣きそうになりながらを言う彼女の言葉を、ズバツときる。

「まあ、いいわ。言い過ぎたわね？ごめんなさい。」

「……」

ディールは実験用白衣の左胸のポケットからタバコをとりだし、パチンと指をならし火を出し、タバコに火をつける。

「あんたの気持ちもわかったし。いいわ。」

いい終わると一気に紫煙を肺に送り、ふうー吐き出す。

メアリーは黙ったまま、それを見た後下においていた鞆を持ち、実験室を出ていった。

……年頃ってわからないわ……。
元は13の子に無理やり15歳にさせたりしたのが余計だったのかしら。あんな物も与えちゃったし……。

「はあ……。」

大きく重たいため息には、少しの後悔や失敗感が混ざっていた。

デイルは、まだ長いタバコを机に押し付け火を消す。黒く焦げたその机とくしゃっとなっているタバコの上に手を置き、ゆっくりと払う。同時にキラキラと光を放ち消えた。

「……そうだわ……。行かないと行けないところがあったんだ……」

思い出したように立ち上がり白衣を脱ぐ。

持っていたそれ座っていた椅子に投げるようにかけた後、実験室を出た。

実験室の机には、焼け焦げた後なんて一つもなかった。

……家を出てから真っ暗な中、ヒューと魔女にベタな物に（……こんな歳にもなつて、こんな物載りたくはないんだけど。）と思いながらも乗って目的地に行った。

人があまり寄り付かない物騒な森の空中に着くと、一気に急降下する。

「きゃっほお」

語尾に音符がついてしまいそうな程だった。

急降下が終わって、スイスイと木々の間をすり抜けるように飛び進むと、物騒な小屋が見えた。

あつたあゝ。

どうやらここに用があるらしい。

小屋の前でホウキから降りる。

ホウキは自然とキラキラしながら消えてた。

小屋の玄関を軽くコンコンとノックをし「入るわよ？」と言だけ置き勝手に中に入る。

中には人はいなかった。その代わりカビ臭く、中央に腐った木性テーブルと対の椅子が二脚あった。どれも腐敗している。

だが、その上には蜂蜜瓶のような瓶があった。その中にはドロツとした土の混ざったよくわからない物があった。

……これって、もしかするのかしら。

それを見た途端、ピンと頭に來た。

…私がアイスにしてやった成虫の蚕…かしら？

……ついでに、メアリーが食べたアイスかしら…？

瓶を見ながらを思っていると、瓶の後ろから一匹の黒い蟻が出てきた。

「あら、アンタそんなところにいたの？」

腰をかがめ蟻に顔を近づける。

「呼び出しておいて自分隠れてどういっつもりかしら？アーム」

怪しく笑み、嫌味の含んだ言葉と、その蟻の名を言った。

「……」

蟻…アームは無言だった。

そうだね。蟻だと声小さいから何言ってるか割らないのよね。…人間にしてやろつと。

あと、この汚いもの全部綺麗にしよ。

そこでディールは左手の指をパチンとならす。すると、全てが新品になり、ピカピカした。

そして、アームを年相応の人間の姿にした。

シルバーの細淵メガネをかけ、ストレートの髪は首の半分ぐらいまであり前髪は右分けになっている。顔は美形男子と言っても過言でもない程。スツとシャープな顔つき。黒のスーツを身に纏っている。

「あら、案外綺麗にじゃない。」

褒め称えた後、綺麗な椅子に座ってから、向かいにアームが座る。

……—アームとディールの接点は、メアリーが出て行ってから
の国の再建だった。小さな蟻が沢山いる所で何かが出来る訳でもなく、アームが力が必要と依頼状をディールに送ったのが始めだった。その時にメアリーの事情も知った。そしてメアリーをたまたま拾った。

それから、再建が落ち着いた今普通に会って話をしたりする仲になった。

机に肘をつき、怪しく舐めるようにいうディール。無表情の向かいに諦めこちら問う。

「あのさ？なんのようと呼ん……」

「俺を人間にしてほしい。」

さっきまで無表情の無言だったアームは、ディールの言葉を遮った。

急に何言ったかと思えば！なんなの！？

「なんで？」

「…メアリー様を探し、メアリー様の元にいたい。」

コイツ、メアリーが私の所にいる事知らないのね…。

…——おもしろい。

何かを企みを描いたディールをみる目には強い意志が宿っていた。

「で、どうやって探すの？傍にいてどうするの？どうして傍にいたいの？」

私はそれが一番知りたいの。

笑みながら問うと、すぐ返ってきた。

「適当に探す。どんな手を使ってでも探す。傍にいて、メアリー様を支え助けたい。」

「ほお〜」

それで？
元は何？

「私は…メアリー様を…想い慕っている…。それだけだ。」

「…」

ディールに笑みはない…。

「…国を去り…あの方は独りになっていると思う…。」

「…」

あゝあ。残念ね。

「心配なんだ…。」

メアリーは独りじゃなくなっただわ。もう。

「はいッ！わかったわ！」

パンと両手を鳴らす。

「理由はよくわかったわ。」

また怪しい笑みを浮かべて、満足そうなディール。
いきなりだった為アームは、驚いて固まっている。

「人間にしてあげるわ。でも、その前にそれ何？」

「ああ。」

それとは瓶の中の物だった。

私の予想が当たってれば、蚕なんだけどな。
私の匂いがするし。

ディールは毎回自分がした物だと分かるようにディールだけがわかる匂いを付けていた。

「それは、メアリー様の食べた物だ。」

……やっぱり。

「そう。…ね？それ私がしたのよ。」

「ッ!？」

「それ元々、蚕だったのよ。今のアンタみたいに頼んで来た。人間じゃなかったけどアイスクリームにしてほしって。私に400万円を払ってまでね?」

私に依頼すると依頼金として高額請求をする。
だいたい、300万から700万。

「でも、魔力は与えてない。」

その言葉に眉間にシワを寄せたアーム。

「それを調べたいから貰っていい？」

原因を知りたい。

それは失敗だから。

「ああ。…それでだ」

…せかせかしいわね。

「はいはい。じゃっ金額は500万ね？」

怪しい笑みは決して忘れない。

「ああ。来月までに渡す。」

「ありがと。…で、これ」

ざっくり胸元のあいた服からは谷間が見える。そこから、ラッピングである袋を出た。それにふっと息を振りかけてからアームに渡した。

「そのクッキーを食べれば、人間になれる。でも二度と元の姿には戻れないから。」

言い終わった後、立ち上がり瓶を持ち玄関に向かう。

「じゃあね」

怪しく笑んだ魔女は小屋を出た。

外に出て片手の瓶を思いっきり地面に投げつけた。
バリンツと音を立て瓶は割れた。
中のどろつとした物から目が出た。

「痛いぞ！なんて事をしてくれる！」

「黙れ」

同時に指からデールは緑の光線を出し異物を焼き始めた。

「出来損ないはいらないの。」

異物の奇妙な悶える叫び声を聞きながら、嫌みを含んだ言葉と、怪しい笑みを残した。

「さてと！これからが楽しみね！」

そして、魔女は自前のホウキを出してから、ウキウキしながら空を舞って帰った。

月光がスポットライトのように彼女を照らしていた。

4（プリンの悲と喜）前書き

四つ目の物語は

【プリンの悲と喜】

4（プリンの悲と喜

『アーム！』

仕事中の彼は、後ろから呼ばれる。それに振り返ると、小さな女の子が駆けて来ていた。両手には皿がある。その上でプリンがユサユサと揺れている。

…メアリー様？

女の子は、彼の前までくるとプリンを突き出してから、

『ねえ！一緒にプリンを食べましょう！』

満面で誘いの言葉を放った。

—
…

「おっじゃまあ〜」

また、この女は。

俺の家に…来やがった…。

「いい加減、あれから毎日くるのは止めてくれないか？ディール」

呆れから、じわじわときている怒りからの言葉だが、楽し気な目の前の魔女には関係ない。

「いいじゃない！来たって！術後の経過を見にきただけよ？」

「術後：もう人間になってから、二週間も経っているんだ。術後も何もないだろ？」

「そうだけど、いいじゃない？」

開き直る魔女には意味がないらしい…。

「はあゝ」

ため息をつくアームには、お構いなしに椅子にドカッと座って、机の上にある小瓶からキャンディをとり口に含んだ。

呆れた…。

まあいい。^{チャ}紅茶でも出してやるか。

またしても呆れるアームだが、一応客の魔女に紅茶^{チャ}を出すため作業に取りかかる。

トレーにカップを2つのせ、小さめのカップケーキも個々に乗せた。

運ぼうとして、振り向いた時だった。

「あ！そうそう！あんた、明日からメアリーのいる中学の教員やらない！」

と、怪しく楽し気に笑む魔女が言ったのは。

「ッ?!」

驚きが隠せず、立ちすくんでしまう。
しかし、魔女は楽しそうだった。

「あんた実年齢は20でしょ? まっ、見た目24ぐらいまで誤魔化し効きそうだし。」

「早くお紅茶!」とその後に命令口調。ディールの言葉に、我に返りトレーを机に置く。

そして自分は、ディールの机を挟んだ向かいに座る。

それを見計らってから、また喋りだす。

「イケメン教員って事にするから。」

サラサラした青黒く光る髪で、シャープな顔。細いフレームメガネがさらにシャープさを際立てている、細身で長身。

世でいう美男子だろう。だからか、ディールはそういう設定にしたのだろう。

アームは、ティーカップを手良い色に染まっている紅茶を飲む。

「コネまくって、どうにかしとくから、明日行きなさいね? 後、名前は…『アンドウ安藤 ムツキ睦貴』ね?

……この女は、意味不明すぎる。

「……」

「じゃあ、これ頂いてから帰ろつと。」

語尾に音符が付きそうな勢いで述べた。

…俺の意志は関係なしか？

ま、メアリー様の傍にいけるのなら構わないか…。

その後、迷惑な魔女ディールは紅茶と菓子を食べた後帰らず、結局、居座っていた。

怪しく楽しそうに笑みながら、1人ベラベラと喋っていた。――…

―…

翌日、アームの顔はどつと疲れてた。寝不足の所為でクマが酷い。重くだるい体を、なんとか正して支度をし家を出た。

そして、昨夜ワンマンショーだったディールに指定された中学を屈指していった。

地理はディールが一気に昨夜頭に魔法でインプットしてもらっていた。

学校に着いたのは午前10だった。

アームは、職員室に行き、色々と挨拶をした後、校則・教育方針なども教えられた。

受け持つクラスも。教科は数学だった。

「安藤先生、午後はじめの授業を集会にしています。その際、生徒達に紹介をさせて頂きますね。」

ふくよかで気前のよさそうな校長に言われた。

それから、アーム……睦貴は集会が始まるまで、受け持つクラスの事を調べたり、校内を探索したりした。

アームの受け持つクラスは、メアリーのいるクラスと優瞳のいるクラスだった。

時は経って、集会の時になった。

彼は壇上で挨拶をする。自己紹介を淡々とこなす中、彼女を探してしまう。

……メアリー様はいないだろうか？
どこかにッ！

探すものの、アームには臆気ながら浮かんではくるが、今の彼女の容姿はわからなかった。

あの魔女にその事を言ったが、怪しく笑みながら、あっさりと流され教えてはくれなかった。

綺麗に縦に並んだ生徒達の中、メアリーを見つける事はできなかった

た。

—
…

あれから4日経った。月曜日の今日は4時限目、優瞳達のクラスの授業があった。授業と言っても、初めての授業だった為、自己紹介をしたら終わっただけだった。

その日の昼休み、昼を食べた後、数学準備室でプリントの整理をしていたら、ガラツと横開きのドアが開いた。

滑りの悪いドアのキュルキュルという音が、室内にも誰もいない廊下に響いた。

誰だ？こんなところに用があるのか？

入口の方に目を向けると、そこには1人の女子生徒の姿があった…。

走ってきたのか肩を上下させて、息が少し上がっている。

…どうしたんだ？

それよりも、誰だ？

そう睦貴が思っている時、女子生徒はドアを閉めて中に入り、椅子に座っている睦貴の傍まで行った。だが、顔は下を向き俯いている状態だ。

……誰だ？

この黒髪の子は…。

「…貴方は、」

俯いている女子生徒はポツリと言った。

「…貴方は、アーム…？」

「ッ?!」

そう言う女子生徒は顔を上げながら言った。
その顔には涙が溢れて苦しそうに歪んでいた。

…もしかして…。

…メアリー…様…？

眉間にシワが寄るのがわかる。

口がへ字のようになっているのもわかる。

でも、自分が無意識に衝動的に立ち上がった事はわからなかった。

「…メアリー…様…ですか…？」

前に立つ泣き顔の彼女は、力なくこくつと頷いた。

その後、彼女……メアリーから「……会いたかった。」と聞こえ、メアリーは額を睦貴の胸にもたれるように重ねた。

……有り得ない……。

貴方を傷つけた、国から追い出した俺に……会いたかった……？

睦貴の胸には嬉しさも勿論あったが疑問もあった。

「……なぜ、ですか？」

俺は貴方に酷い事を言った。
国を大切にしていた貴方に。

睦貴はメアリー……愛莉雛の両肩に両手を軽く乗せる。
その時に、愛莉雛は額を離し顔をあげ向かい合う状態になった。

「……なぜ、会いたかった、と言ったのですか……？」

小さい声調、詰まった口調の後、沈黙が襲った。シーンと聞こえてしまう程。

でも、呼吸の音は聞こえなかった。

そんな中「…だって。」と呟いたような言葉が聞こえ、沈黙は破られた。

「…寂しかったの。」

そう言った時の彼女は、俯いていた。
髪の毛が邪魔で顔は見えない。

「…」

…メアリー様…。

「私は…あれからずっと…寂しかったの…！」

ポタポタッと涙が落ちた。空を落ちた涙は床に落ち潰れて円になった。

気づいたら、愛莉雛を抱きしめていた睦貴。
無意識とは怖い。

…メアリー様。
すみません…。

…すみません…。

「…アーム…？」

すみません…。
メアリー様…。

「…すみません。」

…あの時は、ああするしかなかった。

人間の貴女を匿い養うような事はできなかった…。

それから、睦貴は愛莉雛をギュッと抱きしめていた。

— …

ある日の昼休み。

「食べよープリン」

コンビニの袋を顔の前で、プラプラさせている愛莉雛は数学準備室にいた。

それに気づいた、睦貴は小テストの採点を止めた。

「はい。」

二人は穏やかな笑みを浮かべている。

再会した一週間後から、昼休みの後半になると、愛莉雛が数学準備室へ、二つプリンを持ってやって来た。

二人はプリンと一緒に食べながら、他愛の話しに盛り上がった。

それから、ずっと毎日その時間帯になると愛莉雛はやって来ていた。

今日はそれが三週間目に入った日だった。

今日の愛莉雛は頬を膨らましていた。

「アーム、いい加減に敬語やめてよ！もういいじゃない！なんでもないんだし！私は女王じゃないし！敬語はやめて！」

ムキになる愛莉雛。

「無理です。」

私は貴方に使える者ですよ？

それに、今さら貴方に対しての言葉遣いは直らないでしょう。

笑顔の睦貴。

「もー！」

怒っているのは要求に睦貴が拒むからだった。

頬を膨らましているメアリー様は可愛らしい。

キヤスター付の椅子に座り、お互い向き合い話し合う。

その内容は「言葉遣い」の事だった。

「どうしてよ！もー」

ペロツと一口プリンを口に運ぶ愛莉雛。怒った風な感じだが、嬉しそうだった。

「どうしてもです。」

理由なんて言えません。

それを面白そうに見て笑む睦貴は、椅子から立ち上がり近づいた。愛莉雛の顔が見えるようにしゃがみ、顔を近づけた。

どんどん近づいて行って唇が触れようとした。恋人でもない二人だったが戸惑いはなかった。

そな甘い穏やかな香りが漂いかけた時、ガラツと滑りの悪いドアが開いた。

「ッ！」

一気に二人は離れた。同時に、ドアの方を見ると…プリントを持っていた、潑刺とした金色の神の男子生徒が竦然として立っていた。

その男子生徒の名前を一番に言ったのは愛莉雛だった。

「優…瞳…」

愛莉雛の目は、見開かていた。

眉は眉間によっていて。眉間には少しのシワがよっていた。

…優瞳？

……灘…優瞳か…？

…それよりも、これを見られた…どうすれば？

過去見つからなかったのが幸いだっただが…今これから公になれば、この幸せな一時がなくなる。

人間になった今の俺には職を失うのは痛い。

…だが…この職あってこそこの幸せな時がなくなる方が…一番に痛い。

どうすれば……？

行き詰まった時に、愛莉雛は椅子からガタツと立ち上がった。睦貴も同時に無意識に立った。

愛莉雛はトボトボと力なく優瞳の元へ歩いていく。

そして、手を伸ばしたら掴めるぐらいの距離になった時「…優瞳…聞いて…？」と力ない声が聞こえた。

「私と…先生は…」

俯く愛莉雛と、竦然としていたが俯いていた優瞳だったが、愛莉雛の言葉を跳ね退けて準備室からでて行った。

「待って！」

追いかけようとした愛莉雛は、苦心の表情をして振り返り、睦貴を一度見てから追いかけていった。

その後の彼女の瞳から涙が溢れ出していた事は誰も知らない。

準備室に一人残された睦貴の瞳には、彼女の座っていた椅子と、二人の食べかけのプリンが映っていた。

そして、中途半端に開けられた滑りの悪いドアと、優瞳のプリント

も映っていた。

……この一部始終を二人の者に見られていた事に、三人は知らなかった。

5 (3度目はミタラシ団子(前書き))

5つ目の物語は

【3度目はミタラシ団子】

5) 3度目はミタラシ団子

「待つて！」

あの人を呼び止める為、あの女の声が響く。

あの人を追いかける為、あの女の足音が響く。

その事に吐き気がするけれど、口元が緩みつり上がってしまっ

あの女が今、不幸になろうとしている。

その事がとてつもなく嬉しい。

「何、悪趣味な事してんのよ？気持ち悪い」

後ろからの声に、体が驚きのあまり跳ねた。

「…魔…女。」

後ろに振り返り見ると、魔女がいた。

「何見てんの？愛しい人から邪魔者が居なくなるかもしれないから、嬉し気にみてたの？」

「ッ！」

魔女は余裕ぶつた喋り方、凶星だった私は詰まって言葉さえでない。

「何？凶星？」

楽し気に人を馬鹿にしている。

……魔女だって、影で見てたじゃない！

自分の事は、棚に上げるの？！

腹が立つ。でも、その怒りを相手にはぶつけられない。

なぜなら、

この魔女には

「まあ、蚕からアイスにしてやって、それから人間にしてやったんだから、それなりの事はしなさいよ？」

借りがある。

……5日前。

私は魔女にまた姿を変えて貰った。

一度は魔女に“出来損ない”と言われ、焼き殺されたけれど、実験に必要なだった私は元通りになった。

実験を終えてから、私は『人間にしてほしい』と頼みんだ。

あっさりと魔女は承諾してくれた。
けれど、金額は1000万だった。

今回はミタラシ団子二串が、私の姿を変える。

「さて、“出来損ない”を人間にするか」

魔女は私の入った瓶の中に、ミタラシ団子を突っ込んだ。

キラキラと光りを放ち、順調にいくかと思ったけれど、体は酷く痛み激痛だった。汚い紫の煙を放ちながら私は変わっていった。

「クサッ！ヒドッ！やっぱり“出来損ない”ね！」

そう魔女が言った時には人間だった。

目が開けると一番に入っ視界に入ってきたのは、怪しく微笑む魔女だった。

「……」

「あんた、私に感謝しなさいよ。」

私は机の上。魔女は近くの椅子に座る。そして、タバコをくわえ吸いだした。

紫煙が空気中を漂う。

薬品の臭いが、鼻につく。

「ねえ？ “出来損ない” 。 あんたの名前“ 解田 カイタ 三奈子 ミナコ ” ね？ で、明日までに要求金額を持ってきたてね？ じゃないと、あんたみたいな“ 出来損ない ” すぐに消すわよ？」

「…わかった。…鏡を貸してほしい…。」

「はいはい」と魔女は等身大の縦に長い鏡出した。

姿を見てみると、汚い色なんかじゃなかった。蚕の気持ち悪い姿でもなかった。

鏡に映るのは、焦げ茶色の少しふわつとしたセミロング程の髪、小顔で美人顔だった。

くりくりとした目や小さな小鼻ではなく、二重の少し切れ長い目でスツとした形のいい高い鼻があった。体だって文句なんてなかった。

「…ありがとう」

鏡の前で呟いた時、涙が頬を伝った。

……

人気のない廊下から、場所を移し、今は青空が広がる屋上にいた。

誰もいない。私と魔女だけだった。

魔女は屋上にあるベンチに座り、また紫煙を空気中に漂わせた。

「ね？私、あんたがなんで人間になりたいか理由聞いてないわ。人間にさせてって頼まれはしたけど」

ベンチにいる魔女からそう聞こえて、答えたくはないが、どう答えるか考えた。

…人間になりたいと望んだ理由…それは…。

「…やり直したいと思った。」

それもある。でも本意ではない。
本当の理由は。

「そう。」と魔女は一言置き、次に「…嘘がヘタね？」そう置いた後、私が振り返ると魔女はいなかった。

「……」

1人私は青空を見上げた。

……

……

……

「好きです。付き合ってください。」

愛莉雛と安藤との衝撃的な物を見た、2日後、俺は屋上で告白されていた。

俺の前が顔を真っ赤にし、俯き、そわそわとしている女の子。
見た目、綺麗だった。

小顔で目がシャープで、形のいい高い鼻で。
スタイルもよかった。

焦げ茶のふわっとしたセミロング程の髪は似合っていた。

でも、名前は知らない。クラスの奴でもない。
何の接点もない。

傷つけしまうけど「ごめん。」

と俺は断った。

謝罪の意もこめた。

その女の子は、泣きながら屋上を出て行った。

「お！モテモテだな！優瞳！」

なぜだか、どこからともなく橙吾が出てきた。

「…」

俺はいつもの調子が出ないのと、気分が下がっている所為かうんざ
りし反応しなかった。

「シカトするなよ！」

バシッとそう言いながら、俺の頭を叩く。

「
…」

「
？」

無反応の俺に異変を今更感じたのか、覗き込むように俺の顔を見る。眉間にしわを寄せ「何かあったか？」と探っている顔をしている。

「何かあったか？」

あった。

「愛莉雛ちゃんと何かあったか？」

思いつきりあった。

その所為で、向こうの気持ちかわからない。

「
…ああ。あった。」

俺はコイツになら話せると思った。

———

俺は二日前、出し忘れた数学のプリントを数学準備室にいる安藤に出しに行った時に、衝撃的な物を見た。

「待って！」

聞こえる声は必死で。それは人気のいない廊下には凄く響いて。

だいぶ走った所で、はつとなり、声に抗う事ができない俺は徐々にスピードを落とし止まった。

少しして後ろに、愛莉雛が追いつき止まった気配がした。

お互いに落ち着いたか見計らい、俺は愛莉雛の方に踵を返す。

「…優瞳…」

愛莉雛の頬には涙が伝っていた。

…なんでだよ？

なんで、頬を濡らす必要がある？

泣きたいの…俺の方だよ…

手をぎゅっと握った。その所為で、爪が手のひらに圧力を加え痛い手だけではなく、奥歯にも力が入った。

「…」

愛莉雛は涙を荒く拭ってから、いつもの口調で話した。

「優瞳…。私と安藤先生は何もないから。ホントに何もないから。」

何もない？

…嘘だろ？

キスしそうだった…。

それなのに、否定？

なんなんだよ。

それに余裕があるから、いつもの口調なのか？

「ホントに、なにもな……」と言いつきが始まる、その前に「あのさ！！」と遮った。

それから、また愛莉雛に背を向けてから振り返ってから、本心を伝えたんだ。

「俺さ！愛莉雛の本心わかんね！」

飛びつきりの笑顔で。

いつもの口調で。

俺らしく。

そんな俺に対して対照的に、目を見開き、固まって、悄然としている愛莉雛。そして、頬にはまた涙が伝っていた。

何故だろうか。

涙を拭ってやりたいと今の俺じゃ思えなかった…。

俺はその後、立ち竦んでいる愛莉雛を残して、1人教室に向かって歩いた。

愛莉雛の姿も、教室も遠い廊下で、やっと目から涙が溢れた。

「はー。」

屋上の柵に背中でもたれかかり、話を聞いていた後の橙吾の一言がそれだった。

棒読みかよ。

……やっぱ、コイツに話すべきじゃなかったか…？

橙吾とは反対の向きで、柵に寄りかかっている俺に、後悔の念が襲ってくる。

「はぁ〜」と溜め息を吐こうとした時に「あのさぁ〜」と喋り出した。

「1回さ、3人でさ、話してみたらどっ？」

即座に右にいる橙吾の方に首が向いた。

「3人でか？」

「ああ。3人で本心で話し合ってみたらってことだ。そしたら、少しは見えてくるんじゃないか？」

…確かに、それはそうだと思う。でも。

「…それを…するのが怖い…」

首をゆっくり前に戻す。前を見るとグラウンドが広がっていた。

そのグラウンドの土のように「は？」と橙吾の乾いた声が聞こえた。

「怖い？」

「…ああ。」

「何言つてんだよ！」

だんだんと低くなっていく橙吾の声は、怒りも徐々に含んでいった。

「怖い！？ふざけんな！！」

その言葉を聞いた時、俺は胸倉を瞬時に掴まれ、橙吾に頬を殴られていた。

殴れ飛び尻餅をつく。そして、倒れかかる。

そのままにしといてくれればいいのに、橙吾は馬乗りになった。

グツとまた胸倉を掴まれた。

殴れた頬は痛む。

「怖いだのなんだの！ふざけんな！意気地なしが！当たって砕ける勢いでいけよ！最初は話し聞いて同情した！でもな！今のお前には怒りしかわかねえよ！怖いだとかほざく暇があるなら！愛莉雛ちゃんとまたちゃんとやっていきたいなら！今すぐにでも！その2人呼んで話しつける！ぶつかれよ！」

圧倒された…。

物を言えなかった…。

でも、とてつもなく嬉しかった。

橙吾の優しさが。
橙吾の応援が。

…だからなのだろう。

頬に涙が伝った。

「…あ」

「？」

かすれた小さな声に眉間にシワをよせる橙吾。

もう一度、改めて言う…。

「…ありがとな」

頬も痛い。キレた唇の端も痛い。
それでも、笑顔になれた。に嬉しさが勝っていたからだ。
そして、決意も固まった。

「…俺。2人を呼んで話をする…。」

「！」

「…心配かけて、ごめんな?…ありがとな」

俺を見下ろしている橙吾は、困ったような笑顔をして「どういたしまして…」と言った。

…その日の夜。俺は愛莉雛にメールで、明日の昼休みに屋上に安藤ときてほしいと送った。

…

…

…

人の以内、廃校となったある小学校で夜、魔女の声が響いた。

「ちょっと!なんでアンタ、優瞳に告白してんのよ!?」

教室にある古びた椅子に偉そうに座り、タバコを吸いながら罵声を吐く魔女。

「…」

その前には蚕であつた人間がいた。

「バカじゃないの!元は蚕で、人を不幸にしといてアンタがなんで

幸せになる為に動いてんのよ！気持ち悪いわね！この蚕！」

魔女の指の間にあったタバコは、火のついたまま元蚕に投げつけられた。元蚕は動きもしない。だが、熱さに苦心の表情になっていた。そんな中、ピピッと魔女の携帯電話が鳴った。携帯を開いてみるとメールがあり直ぐに内容を読むと、さっきまでとは違って全てが一変した。

そして、怪しく微笑んだ。

「明日の昼休みに屋上にいってみなさい。」

そう命令してから「全く話しの接点はないけど、アンタが人間になりたいと思った理由って何？」と聞いてきた。

元蚕は、無表情で答えた。

「…灘…優瞳を…好きになったから…そして…あの女を…殺す為…」

それを普通の表情で受け取った魔女は「あっそ」と立ち上がり、元蚕に一発ずつ鳩尾に蹴りと殴りを入れてから、何事もなかったように帰った。

苦しみ悶える元蚕は

「…それと…魔女も…殺す為…。」

憎悪の満ちた声で言った。

6 (虹色チヨコレート) (前書き)

6つ目の物語は

【虹色チヨコレート】

6) 虹色チョコレート

夜なのにカーテンも閉めず、電気もつけてない。その為、月光が薄き色の光で明るく照らす生活感のない部屋で、ベッドに仰向けで寝ている愛莉雛は、幼い時の事がふと頭をよぎった。

そこには、アリで幼い愛莉雛が『アーム!』と仕事中の執事に後ろから声をかけていた。

『ねえ!一緒にプリン食べましょう!』と満面の笑みで誘っていた。

あの後…プリンだけじゃなくて、チョコレートも食べんだっただのよね……あの頃は、こんな事になるなんて考えも思いもなかったわ。

こんな事に…。

でも、今更何を思ったって、どうにもならない……。あの頃のように、キレイに幸せに、あの場所で、優しいみな達と生活するなんてできないわ……。住む世界が違う…。

それから、呆然とした後に、体を起こし近くに置いてあった携帯電話を手取る。

漆黒の折り畳みタイプの携帯は、デイルが与えたものだった。

さっき来た優瞳からのメールの返信をしていなかったなので、簡素に

『わかった』とだけ返した。

優瞳…と…アーム。

天秤にかけてみれば、今は、どちらにも傾かない。

ただ寂しくて、誰かがいてほしくて、魔女の扱女弾を使ってそばにおいただけの優瞳。

でも、いつの間にか、優瞳を好きになっていった…。

傍にいてくれて、明るくて…暖かくて、笑顔も行動も眩しくて。鬱陶しいと感じてしまう時もあるけど…。

まるで、光のようで。

私の心は段々と満たされていつていた…。

この時は、優瞳しかなくて天秤も何もなかった。傾くどころか…優瞳だけだった…。

…でも、私は…きっと最低で…アーム―…安藤睦貴が現れた事で…天秤が出てきた。

最初は、目の前に現れた事に愕然とした。それと怒りも湧き上がってきた。

『今更……!』と。

それでも、人間になったアームを目の前にした時、涙が溢れたのは、きっと、眠っていたはずの、忘れていた恋に風が吹き、芽吹いたからだった…。

思い出してしまったから…。

アームへの恋慕を思い出してしまったから。

「はあ………」

乾いたため息が出るが、涙腺は緩くなり視界がぼやけていき、やがて、下まぶたから下へ伝っていった。

……どうすればいい？

何かをしようとする気力のない愛莉雛は、ベッドへ体を沈ませて、瞼を下ろした。

その時、また涙が目尻から流れ出した。

――…

—
…

眩しすぎる太陽は、昨日から沈んでいる愛莉雛とは裏腹に、赤々と燦々に光を放ち当たりを明るく照らしている。その光を鬱陶しく感じる。

「呼びにいかないといけないわ…」

午前中の最後の授業を前に、席に座って、机にもたれかかり、腕に顔を埋めてはそう呟いた。

鼻からゆっくりと息を吐き出してから、ゆっくりと瞼を下ろす。

視界は、まるで夕暮れの太陽のような橙色をしていた。その事をまた鬱陶しく感じた…。

そして、思いだす。

太陽のような優瞳を。

昨日の月光のような睦貴を…。

それから、一時間経ち昼休みに入った。いつもなら、桜色のオーラを纏ってくる優瞳が教室の入り口にいる。
でも、それはない。

……いる訳ないわよね…。第一、呼ばれている身だし…。
バカみたい…。

優瞳は隣にはいないが、いつも通り屋上に向かう。今日はクローバーのデザインの弁当箱を、カバンの中に残して。

数学準備室へ繋がる廊下には、誰もいない。

元は緑だったろう褪せた廊下のタイルは、余計にしんみりとした寂しさを際立たせていた。

数学準備室の前で、戸惑ってしまう。

……睦貴……。

あの時1人にしたままにして、あれから2人で会ってない……どんな顔して会えば……？

でも、止まってしまったら何も起きない。解決もしない。

だから……！

いつの間にか震えていた手で、数学準備室のドアをガラッと開けた。

「……」

中を見た時、一瞬にして力が抜けた。
中には誰もいなかった……。

……いない……？
なんで……？

ポツポツと踏み出し、少し中に入ってから、室内を見渡してから、
愛莉雛はその場を後にした。

「はあ…。」

アームは…睦貴はいなかった…。

…あの時に置いて行った時に…優瞳を追いかける前に一度見たとき、
泣きそうな苦心な表情をしていた…。

その表情に後ろ髪を引かれる思いになったけど…結局は置いていつ
てしまつて…。

優瞳を追いかけている途中は、睦貴の顔が残つて、胸は重苦しくキ
リツと痛みが走つた…。

恋愛的な関係にはなつてないのに…。
私は最低…。

優瞳に追いついて弁解をして…。

『俺さ！愛莉雛の本心わかんね！』

そう言つた優瞳は、いつもの飛びつきりの笑顔は、悲しかった…。

口から何の言葉も放つこともできなくなつて…そんな事をさせて、
言わせた私に失望して…。

本心にただ最悪だと思った…。

…——ずるい私がハッキリしないから、優瞳を、睦貴を、傷つける…。

気がつけば、屋上へと繋がる階段の前にいた愛莉雛。
こつと一段目につま先が当たる。足をあげ、上がろうとした時に「
叶女 愛莉雛」と後ろから呼ばれた。

誰？

振り向くと、見た事のない女子生徒がいた。
焦げ茶色のセミロング、スタイルのいい体、美人顔で少し切れ長の
二重、高い形のいい鼻をしている女子生徒だ。

誰なの？

「誰」と聞こえた時に、「誰とは言わせないわよ!」と鋭い声
と言葉で言ってきた。

…？

益々訳の分からなくなる愛莉雛は固まる。けれど、目の前の女子生徒は綺麗な顔を、怖く歪ませ愛莉雛を睨んでいた。真っ黒の憎悪を含んで。

頭をフル回転させたけれど出てこず「わからないわ。誰なの？」と聞いた。

愛莉雛はそれと同時に女子生徒と向き合った。

女子生徒は相変わらずの顔で、チツと舌打ちをした。そして、口を開いた。

「私は今は解田 三奈子って言うの。…まあ？これになったのは、ごく最近だしいいわ。」

何言ってるの？

…それよりも私は。

「悪いけど、後でいいかしら？今、急いでの。」

「悪いけど」と付け足し、背を向けようとした時に、グツと腕を掴まれた。

その所為で、フツと浮く感じがし前にいる解田三奈子とまた向き合うようになる。

相変わらず、綺麗な顔を怖く歪ませて愛莉雛を睨んでいる。

「だから、何なの？用があるなら、簡潔に手短に言ってくれない？」

愛莉雛の眉間に、小さな皺が寄ってきた。
口調もいつもより尖って来だした。

愛莉雛の言葉の後、沈黙というより睨み合いのような感じで、あたりは静まっていた。だが、2人の間には、青い火花がパチパチと散っていた。

「なら！言っわ！」と終止符を打ったのは、三奈子だった。

…一々、長いのよ…！この女…！！

それに！この手！早く話してほしいわ！

引き止めるまではわかるとして、長いわよ！

このイライラは、目の前の女から出た言葉で、どこかにいった。

「私は、アンタの食べた汚いアイスクリームだった女よ！」

「ッ？！」

何て言った？

目が見開き硬直した愛莉雛に、三奈子はドンドン話していく。

「私は元々《蚕》だった！それが嫌で、魔女に頼んでアイスクリームにして貰ったのよ！」

…魔女…？

「…デイル…？」

硬直していたが、頭だけは回転させて答えを出した。

「ええ！そうよ！多額の要求金額を払ってまで、私は綺麗でみんなから好かれる甘いアイスクリームになったの！なのに！！アンタは私を貶したわ！」

その時に、フツと握られていた腕が解放された。何となくその事に驚き、女の顔をみると涙をいっぱいに浮かべていた。

…私の所為…？

と気にした時に、左頬に痛みが走った。

そして、その音は人気もなく昼間なのにしんみりとしている廊下に、罵声の余韻と一緒にパチンと響いた。

「私はアンタが憎いのよ！！」

俯き頬を押さえる愛莉雛に、罵声と涙声が合わさった。もう、何を言っているかハッキリわからない、ただ泣き叫んだように聞けえた言葉が降ってきた。

……。

なんか…ぐちゃぐちゃ…。

訳がわからないわ…。

…私の所為って訳…？

私がいなければ、この女も…優瞳も…睦貴も…

幸　せ　だ　っ　た　？

でも…私だって…こうなりたくなつた訳じゃない…のよ…。

ビー玉のような目になっている愛莉雛の瞳には何も映らない。
真つ青なビー玉のようだった。

そして、そのビー玉は下から海に沈む。

「…あと…」

崩れ壊れかけている目の前の女は、また言い出す。

「…優瞳から離れなさいよ…」

憎悪に満ちた目の前の女の声は、どす黒く有り得ないものだった。
愛莉雛は、ふっと顔を上げた。
優瞳と出たからだった。

「アンタが邪魔なのよ！」

…何で？

「…私は優瞳が好きなのに！なのに！アンタが邪魔で！優瞳は私のモノにならないのよ！それに！アンタが優瞳を傷つけてるのよ！悪魔よ！アンタなんて！」

頭が痛い…。

「いなくなればいいのよ！！」

ああ…。

『私はアンタが憎いのよ！』
解田の憎愛に満ちた表情。

『俺さ！愛莉雛がわかんね！』
優瞳の綺麗で残酷な程の悲哀な笑顔。

『メアリー様…』
睦の悲惨な笑み。

私は…最低だ…。

…この女の事はどうでもいい…

でも…あの二人を…苦しめている…事が嫌だ…。

本当に…。

これは本当に、私の所為…。

…私は…。

“邪魔な存在だ”

愛莉雖は無意識の内に、振り返り階段を走って登った。

ビー玉を濡らす海が溢れて流れている事も知らずに。

屋上に向かって、走っていた。

バンつと屋上へ続く扉を押し開けると、そこには、嫌みな程、残酷な、雲一つない、青が広がっていた。

立ち止まって…立ち竦んで…。

膝は曲がりそうになって…。

視界は、ぼやけていて…。

視野は、細くなっている…。

それでも、嫌みな青は、ハッキリとわかる…。

止まる事を知らない涙は、どんどん溢れ出ている…。

そして、終いには、力ががぬけて崩れようとした。

その時、誰かが愛莉雛を支えた…。

「愛莉雛」

その人物は、愛莉雛を支えた後、ぎゅっと抱きしめて、そう愛おしそうに呟いた。

燦々と赤い太陽。

その光は黄い。

そして、上の辺り一面に広がる青は、どこまでも続いていた。

そして、それは何よりも愛莉雛を苦しめた。

LAST（白昼の光（前書き））

最後の物語は

【白昼の光】

LAST 白昼の光

「愛莉雛」

…誰…？

人の識別は声だけで、親しい人物はわかる。
けれど、それさえもできない愛莉雛。

恐る恐る顔を上げ、その人物の顔を見る。

その途端、目が少し見開き、安堵から違う涙が流れてきた。
今思えば、研究室の匂いと愛用している香水の香りがする事に気が
ついた。

ディールだった…。

「大丈夫かしら？」

ディールはいつもと違って、悲しそうに笑っていた。

…どうして謝るの？

引っかかりながらも、一杯一杯の中、何とか頷く。

「立てるかしら？」

体を離して、先に立ち上がったディールは愛莉雛に手を差し伸べた。

今だに流れる涙は、視界をぼやかす。

その手に右手をおき、ゆっくりと震えながら立ち上がった。

「拭きなさい」

ハンカチを出した、命令口調だけれど、ディールの言葉に甘え涙を拭き取った。

「それ、あげるわ」

そう言うてから、愛莉雛の手首を軽く握ると歩き出した。

…私は…どうすればいい？

さっきディールが悲しい顔をしたのも…私の所為…？

俯きそう思っていると、ディールが止まった。その拍子に顔を上げると、見慣れた顔があった。

柵に背でもたれて立っている睦貴と、そこから少し離れた所にいる優瞳はこちらを見ていた。

「…ッ」

愛莉雛は、即座に顔を二人から背けた。

我慢ならなかった。

顔を見るだけで、胸が苦しくなる。

…ごめんなさい…。

私がいるから…。

また涙が視界をぼやかし始めた。

「愛莉雛」

優しい声は、隣でいつも笑っている優瞳の物だった。

「泣かないでくんない？」

顔をあげると、苦笑いしている優瞳があった。

いつの間にか、近くにきていた優瞳は、そういつと愛莉雛の腕を優しく掴むと少し前に歩かせた。

それから、そこに立たせてから自分は柵の方へ行った。

愛莉雛から見て右前に睦貴。左前に優瞳と三角形になっている。

少し間が開いてから「今日―」と優瞳が話そうとした時に、後ろでバンツと屋上のドアが勢いよくあいた。

全員そつちに目がいた。そこには、三奈子がいた。

三奈子は走ってきたのか、少し息が切れている。けれど「待ちなさいよ!」と愛莉雛に向かって叫んだ。優瞳がいるにも関わらず。

優瞳は「あつ…」と何か思い出したように、小さく言った。

「…あれって、この前、告白してきた」

思いだしたのは告白された相手の事で。その相手が、今バンツと入ってきたのだ。

叫んだ後、三奈子はズシズシと愛莉雛に近づいてきた。

でも、途中で一変して、しとしととおしとやかな歩き方になった。

三奈子は愛莉雛の隣にくと、優瞳に笑顔で「こんにちは」と挨拶をした。

…なんなの…？
この豹変ぶりは…

さっきまでの涙はとまり、何となく、いつもの愛莉雛がいた。
本当に何となくだ。

眉間に皺を寄せていると「悪いけど、君帰ってくんない？」優瞳がいう。また一変して「嫌よ。私だって関係者なんだから」と優瞳を睨み付けた。

「それでも」と切り出そうとしたが、諦めたのか何も言わなかった。

「てか…」と転換をした。

その時に「俺から言わせてほしい。」と睦貴が遮った。

「…。」

遮られ口をつぐんだ優瞳は、許したのだろう。

睦貴は、優瞳を横目に2歩程前にでた。

そして、綺麗な顔は真剣になり意を決したように睦貴はいい始めた。

「ずっと前から、愛莉雛だけなんだ。」

…ずっと前…。

そうね…。

私が生まれた時から…ずっと一緒にいてくれたのよね。

遊ぶのも、おやつを食べるのも、何をするのにも…傍にいてくれた。

その時、初めてケーキを作った時の事を思い出した。

スポンジを何度も焦がして、泣く愛莉雛につきつきりで教えてくれた事を。

「やっとの想いで愛莉雛と会えた時、本当に愛莉雛しかいないと思ったんだ。そして、こんなにも愛莉雛を好きなんだと実感したんだ。

」

落ち着いた声に焦りも、何もない。
その声は、逆に愛莉雛の胸にじんわりと響く。

…ごめんね…。
ありがとう…。

涙が溢れだしては、痛む心にしみていく。

…でも…何か違うの…
何か違う…。

愛莉雛は、涙を流しながらも心の違和感に気付き始めた。
少し間があいてから睦貴は、少し微笑みながら苦しそうに言った。

「……愛莉雛、一緒にきてほしい」

その言葉に、ワッと涙が溢れでた。

…ありがとう…。
睦貴…。

…ごめん。

泣き崩れそうになった時に、また愛莉雛は支えられた。

「愛莉雛。」

耳で聞こえるのは、優瞳の声。体に感じる体温は、優瞳の体温。自分の状況を把握できた時には、目が見開いた。思わず、睦貴を見ると、睦貴は諦めかけたような顔をして、後ろに下がった。

やっと状況把握をできた時、突然に

「愛莉雛、俺はさ。愛莉雛が好きなんだ。」

始まった…。

突然すぎて、目が見開く。

愛莉雛を抱き締める優瞳の腕は、ぎゅっと力が入り、より密着していく。

言い表せない感情が出ているようだった。

…優瞳…？

突然すぎる…。

…他にも人がいるのに…。

と思っていると、憎悪に満ちた視線が感じられた。

けれど、あえてそつちをみない。今はそれどころじゃないからだ。

そよそよと心地いい風が流れた。同時に優瞳は続きを言い出した。

「やっぱりさ。愛莉雛がいないとダメなんだ」

…優瞳…。

「何をやっても、やる気が出なくて…どんな時でも愛莉雛の事を考えてしまうし…」

ごめんなさい…。

…優しすぎる…眩しすぎる貴方に…私は…

「この前の先生との件は本当に何もないと信じるからさ。」

…扱女弾を使って…しまった…。苦しめてしまったから…。

ごめんね…。

「だからさ。また一から始めたいんだ。好きなんだ。どこにも行かないでほしい。」

…ごめん…。

優瞳の純粋な想いに、どうしようもない涙が溢れた。
顔を覆って、座りこんで、泣き叫びたいくらいだった

…謝罪の言葉しか出てこないけど…凄く嬉しい…。凄く…嬉しい…。

優瞳の背中に、まだ回していなかった腕を回しながら、愛莉雛は気づいた。

自分の想いに…。

そして、これからどうしていくかを…。

回した腕に、ぎゅっと力を込めて、少しの間抱き合っていた。

そして、優瞳からゆっくりと離れた。
二人は、ただ微笑んでいた。

「なんでなのよ!!」

暖かい空気がやっと流れこんできたと感じられた時に、激しい反感の音が響いた。

ハッとしたように声の方をみると、発声元の三奈子は、肩と握りこぶしに力をぐっと込めて、体はぶるぶると震えていた。目は、キツとして殺意まで感じられそうなものだった。

「ッ!!」

愛莉雛は咄嗟に胸を辺りを、きゅっと握りしめた。その部分は、紙がくしゃくしゃになったようだった。

「どうして!この女なのよ!おかしいじゃない!私の方が優瞳を想う気持ちは大きいのに!」

罵声は鼓膜を何度も何度も叩く。

「大体!元はちっぽけな蟻でしかなかった、この女のどこがいいのよッ!」

元は蚕が言ってるけど...わかってる。

私は...。私が...

全員が罵声を聞き流していたが、最後の言葉に優瞳だけが目を見開いていた。

愛莉雖は苦しそくに「私…元は蟻なの。」真実を告げた。

だから…。

私は…。

それに…私は…。

「なんー」と優瞳が聞き買えそうと言った時に「消えろッ！」罵声が遮った。

「アンタこそ消えろッ！」

その言葉と共に、般若になったディールが、三奈子に飛び蹴りをした。人体接触の音、倒れこむ音が一瞬の内に聞こえた。

…ディール…。

「この出来損ないがッ！」

…でも…その女は、間違った事は言っていない…。私が消えるべき存在って。

「消えろッ！」

その罵声だけで、ディールは蚕をバツと消してしまった。後に残ったのは、汚い煙だった。

周りは対して驚いてはいなかった。

愛莉雖は、上の果てなくに続く青を見上げた。

すると、突然に段々と愛莉雛の体から光が放たれ始めた。

「「！?ッ」」

本人も、その場にいる全員も、息を飲んだ。

…うそ…?

自分の体を見下ろすのと、六角形の黄色い結晶がぽつぽつと体から出ては消えていた。

「愛莉雛！」

…消える…?

私が…あんな事を思ったから…?

…なら…絶好のチャンス…。

それでも、愛莉雛の目から涙が浮かんだ。ゆっくりと優瞳を見ると、優瞳は愕然としながら苦悶の表情をしていた。

「…優瞳。」

そつと微笑んだ時に、右の目からすつと涙が頬を伝った。

…私は…私はね…?

優瞳が…好き。

やっとわかった。

自分の気持ち…。

でも、結局、また、
優瞳を傷つけてしまうから…。

だから…私は消えるべき。

「…ありがとう。」

どんどん涙は伝う。

デイルも、睦貴も、優瞳も…。

…好きだから、大切だから、私は消える…。

どこかに消えるじゃなくて、姿が消えるになってしまっているけど。

「…なんで…？アンタは消える必要ないじゃない…！」

強気なデイルが泣いていた。思わずその事に驚いた。
消えかけている体で、デイルの元にいく。

「デイル…ありがとう…。」

悲しく笑んだ。

デイルはただ固まるしかなかった。

そして、それから睦貴の元にいく。

あつてないような右手で、睦貴の頬に触れる。

「…小さい時から、ありがとう。蟻だった時は…貴方が好きだった。

」

今までいってなかった事と、これ以上ない笑みを残した。

「…はい。ありがとうございました。」

涙を流しながら、彼氏は執事に戻ったようだった。

最後に優瞳の所に戻った時、もう体は胸の辺りまでしかなかった。

「優瞳…」

「愛莉雛…」

愛しい人の名前を呼びながら、引き寄せられるようにして近寄った。

だらだらと涙を流す優瞳に、胸が締め付けられる愛莉雛。

「…一緒にいたいんだ。」

「…うん」

「…たくさん聞きたい事があるんだ…」

「…うん」

頷くだけしか愛莉雛にはできなかった。

「…好きなんだ」

「うん…」

もう首までしかなかった…。

「…愛莉雛行くなッ！」

ごめん…。

もう…無理かも…。

ねえ？優瞳…私…
貴方が

「…好き。」

想いを告げた叶女 愛莉雛という、存在は光となつてきえていった。

その後、3人は快晴の空の下、悲しみに溺れた。

そして、愛莉雛の愛しい人の後ろには、小さな蟻がぽつんと横たわっていた。

… f i n .

LAST（白昼の光（後書き））

くあとがきく

読んでいただき

ありがとうございました（＊＾－＾＊）

書き方、ストーリーが

めちゃくちゃでしたが

何とか書いてよかったです

初めて企画にも

参加できたのでよかったです

皆様

本当に

ありがとうございました（＊＾－＾＊）

2011/08/13

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1770s/>

ミワクの国

2011年10月6日21時57分発行